

● 東 北

工 藤 一 郎

山形交響楽団が創立45周年を迎えた。現在の指揮者体制は音楽監督・飯森範親と首席客演指揮者・鈴木秀美。50名弱という編成を逆手に取るようにして技量とアンサンブルを磨き、古典奏法の堅固な基盤の上にレパートリーを構築してきた。それに大きく作用したのが飯森指揮で2007年から8年間続けられた「アマデウスへの旅」シリーズ。「現代のオーケストラが持つ機能性を活かしつつ古典奏法およびピリオド楽器を用い、当時の演奏スタイルや響きを追求する」というコンセプトのもと、モーツァルトの全交響曲はじめ協奏曲、ミサ曲などを演奏した。2008年には山響専属の「山響アマデウススコア」（音楽監督：佐々木正利）が完成されて急速に実力を高め、シリーズ外の公演の成功にも貢献している。この「アマデウスへの旅」を収録した13枚組CD「モーツァルト交響曲全集」は、音楽之友社の2017年度「レコード・アカデミー賞」特別部門（企画・制作）を受賞した。前年の第256回定期でホルン・ソロと指揮を担当したラデク・パボラークを首席客演指揮者に迎える2018年度からの新体制に注目が集まる。

仙台フィルハーモニー管弦楽団は、2006年に始まったパスカル・ヴェロを常任指揮者とする体制が最終段階を迎え、彼との共同作業で築き上げた色彩的で自発性に富んだ仙台フィル・サウンドが完成の域に達した。定期演奏会では毎回いづれ劣らぬ名演が繰り広げられているが、やはりヴェロ担当の回が光る。内、楽団内の首席奏者をソリストに起用した第307回（ステイヴンス「チューバ協奏曲」／ソロ：ピーター・リンク）、第313回（コリアーノ「クラリネット協奏曲」／ソロ：ダヴィット・ヤジンスキー）が、その超絶的名演とともに印象に残る。客演指揮ではアンドレア・バッティストーニが期待通りの快演を聴かせた第308回と、小泉和裕が崇高なまでの完成度をもたらした第312回（彼の首席客演指揮者としては最後のステージ）を挙げたい。2018年度から飯守泰次郎を常任とする新体制になるが、このオケの歴史に重要な足跡を残したヴェロ、小泉との関係は今後も温存して欲しい。

仙台の秋の風物詩「仙台クラシックフェスティバル（せんくら）」が12回目となって9月29日から10月1日までの三日間に行われ、計121公演に前年を上回る延べ39,300人の来場者があった。内、演奏のクオリティー、音楽的燃焼度ともに窮極の高みを築いたのがドヴォルザーク「ピアノ五重奏曲」〔ヴァイオリン：第1回仙台国際音楽コンクール（SIMC）第1位のスヴェトウリン・ルセフと仙台フィルコンマス＝西本幸弘、ヴィオラ：同首席＝井野邊大輔、チェロ：元仙台フィル首席＝原田哲男、ピアノ：第3回SIMC第1位の津田裕也〕。近年、聴衆のレベルの向上も著しい。

前年の第6回SIMCの入賞者の“里帰り公演”もいくつかあったが、ヴァイオリン部門第1位＝チャン・ユジンのリサイタル（6月25日）と、仙台フィル第309回定期（指揮：ヴェロ）に登場したピアノ部門第3位＝北端祥人の熱演が白眉。

「仙台オペラ協会第42回公演『フィガロの結婚』」（9月2・3日、東京エレクトロンホール宮城／芸術監督：佐藤淳一／演

出：渡部ギユウ／指揮：船橋洋介、仙台フィル他）は、前年の仙台フィル第300回定期でレリオ役を演じた演劇人＝渡部によって、演劇的側面を重視した舞台が作り上げられた。

2014年に開始した室内楽シリーズ「Music from PaToNa」〔監修：三宅進（仙台フィル・ソロ首席チェロ）／プランナー：西沢澄博（同・首席オーボエ）、助川龍（同・首席コントラバス）〕が、考え抜かれた選曲、高水準の演奏、付随イベントの実施などで厚い客層を築き、好調に継続中。

東北の若い世代の作品を募集してプロの演奏家が演奏する「ヤングコンポーザーコンサートin東北」（実行委代表：宮城学院女子大学教授・小山和彦）が好評のうちにスタートした。

2011年3月26日、仙台フィルが見聞寺で行ったコンサートを初回とする「復興コンサート」は、同楽団員を中心に他のプロオケ楽団員、仙台地域在住の音楽家などが被災3県（岩手・宮城・福島）に赴いて継続実施中。2017年9月には700回を超えた。「音楽の力による復興センター東北」の主催。

2012年に「ウィーン・フィル&サントリー音楽復興基金」が5年計画で開始した事業「こどものためのコンサート」は2016年に終了し、以後5年間にわたって仙台フィルメンバーが被災3県に音楽を届ける「サントリー&仙台フィル／みんなのまちのコンサート」に引き継がれて継続実施されている。（株）サントリーホールディングスが主催する東日本大震災復興支援「サントリー東北サンさんプロジェクト」の一環。

復興支援の演奏活動は他の音楽団体や個人によっても行われているが、それらへの助成の一端を担っているのが「ウィーン・フィル&サントリー音楽復興記念賞」。この賞は2012年に「（公財）サントリー芸術財団」内に設けられ、審査によって年間10数件程度、助成金とともに授与されている。2017年の授賞対象の内、広域的な内容を示したのが被災3県と沖縄の子供たちによる合同オーケストラコンサート「響け！復興へのハーモニー～つながる未来～Vol.2」（8月20日、日立システムズホール仙台／指揮：琉球フィルハーモニック正指揮者・松元宏康）。この活動全体を主導するのは元仙台フィル・ホルン奏者で現琉球フィルハーモニック代表理事（那覇ジュニアオーケストラ団長）上原正弘。出演したのは岩手県大槌町のエル・システムジャパン「大槌子どもオーケストラ」、宮城県仙台市の「仙台ジュニアオーケストラ」、福島県相馬市のエル・システムジャパン「相馬子どもオーケストラ」、沖縄県那覇市の「那覇ジュニアオーケストラ」の4団体による合同オーケストラと「NHK仙台少年少女合唱隊」（以上、総勢約90名）。Vol.3は那覇市で行われる。「エル・システムジャパン」は2012年に設立され、同年「相馬子どもオーケストラ」を、2014年には「大槌子どもオーケストラ」をスタートさせている。

以上の諸活動を推進している3団体「（公財）音楽の力による復興センター東北」、「（株）サントリーホールディングス」、「（一社）エル・システムジャパン」は、世界防災フォーラム（11月26日、仙台国際センター）でその活動状況を報告した。

演奏に子供対象のイベントやワークショップを付随させ、未来へ踏み出すきっかけを与えようとする活動も内容を深化させつつ回を重ねている。内、仙台フィル・コンマス西本幸弘のリサイタルシリーズ「VIOLIN able ～ディスカヴァリー～」はvol.4（12月8日、PaToNaホール／ピアノ：大伏啓太）に、また、ピアニスト・小山実稚恵が自らゼネラルプロデューサーとなって行っている「こどもの夢ひろば“ボレロ”」は3回目（7月28・29日、日立システムズホール仙台／指揮：広上淳一、管弦楽：宮城教育大学管弦楽団）となった。